



ゼンバシヤ通信

学長からメッセージ



これからの日本の社会、産業の発展には多様な人材の活躍が欠かせません。本学の第一のミッションである自走力のある高度な科学技術者を育てることにしても、女性教職員、女子学生の皆さんや外国人教職員、留学生を含めた多様性のある人材が切磋琢磨して活動していくことがより重要となると考えています。

本学の女性教職員の割合は平成24年度では全国86の国立大学で最下位の2.7%(5名)でしたが、26年度には5.3%(10名)まで増加し最下位を脱出しました。平成27年5月では7.7%(15名)まで増加しています。これは女性限定公募による増加だけではなく、「優秀な人を選んだら結果的に女性だった」という例も複数含まれています。また、女子学生の活躍に目を向けると、学業成績はGPAのみでみると女子学生のほうが全体の平均よりもやや高く、サークル活動、インターンシップ・海外研修等への参加も積極的です。次の段階としては、学生の出口、すなわち皆さんの就職分野を広げていくことが肝要と考えております。学部や大学院を修了して活躍していくような雇用の場を地域とともに作り上げていく取組みが始まっています。

平成25年度に選定された文部科学省「科学技術人材育成費補助事業女性研究者研究活動支援事業(一般型)」のプロジェクトは27年度まででしたが、28年度からはさらに本学全体での取組みとして、性別や国籍に関わらず教職員・学生が活動しやすい環境を整えてまいります。

国立大学法人 室蘭工業大学 学長 空閑 良壽

ものづくりと男女共同参画



若い頃から工学やものづくりに触れることは後の進学や就職に対して大きな影響を持つことから、これまで私はものづくりに触れる機会をさまざまな形で提供してきました。「ものづくり教室」は、小中学生にものづくりを体験させることによって、ものづくりの興味を湧かせ、理科本来の楽しさや、人と協力し合い製作するコミュニケーション能力、さらに一つのを完成させることによる達成感を味わわせることを目的としています。また、「理系女子応援プロジェクト」では、女子高校生を対象にものづくり体験のほか製造業の現場見学、本学女子学生との懇談の機会を与えることで、女性は理系に向いていないといった誤ったイメージを払拭することに努めてきました。

平成27年に本学は文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に採択されました。「ものづくり・人材」が拓く「まち・ひと・しごとづくり」と称して、道内のものづくり系大学・高専を中心に産学官金の連携により、教育カリキュラムの改革や雇用創出に取り組み、若者定着・地元就職率の向上を図るという5年間のプロジェクトです。「ものづくりのまち」に拠点をおく室蘭工業大学は、未来をひらく科学技術者を育てるとともに、人間・社会・自然との調和を考えた創造的な科学技術研究を展開し、地域社会、さらには国際社会における知の拠点として、豊かな社会の発展のためにより一層の地域貢献を目指しています。

もの創造系領域 教授 清水 一造

(ものづくり基盤センター長、地域共同研究開発センター長)

当日は、男女共同参画推進室長木幡教授の司会により空閑学長の開会挨拶、来賓挨拶で始まりました。まず女性研究者支援ユニットコーディネーター貞許特任教授からのプロジェクト成果報告、本プロジェクトで研究支援員の配置をうけた清末准教授からの報告、次に日本レーザー社長の近藤氏から「多様性を受け止められるキャパシティ」というタイトルで講演がありました。日本レーザーは2013年3月に経済産業省「ダイバーシティ経営企業100選」全国43社に入選その他数々の受賞があり、多様性を生かしていく近藤社長の手法が注目されています。講演後は、科学技術振興機構(JST)の山村プログラムオフィサーの挨拶に引き続き、伊藤理事の閉会挨拶で締めくくられました。



JST山村プログラムオフィサー挨拶

「ただいま、近藤社長の日本レーザーのすばらしいお話を伺ったのですけれども、室蘭工業大学も非常にすばらしい成果を上げていただきました。私どもは、当初、課題採択になりましたときに、女性研究者の在籍率が1.2%ということで、正直、どうしようかなと思ったのですけれども、1年目に伺ったときに既に最下位は脱したというお話を伺いまして、その後も順調に女性教職員の採用を進めていただきました。

一方、環境整備、意識改革、次世代育成と非常にバランスよく進めていただきまして、私どもは3年間で非常によい成果を上げていただいたと思っています。これもひとえに学長の強いリーダーシップ、そして、部局の先生方のご尽力のたまものだと考えています。また、コーディネーターの先生に非常に活躍していただきまして、よく取りまとめていただいたと思っています。

この事業は3年間の事業ですけれども、事業の終了後は機関で自主的に取り組みを継続、さらに発展させていただくことになっておりますので、補助金が切れましたときに緑の切れ目ということではございませんで、このすばらしい取り組みを今後も継続、発展させていただきたいと思っております。」

閉会挨拶(伊藤理事)

「・・・今日聞いて、日本レーザーの会社のすばらしさはよくわかりました。その中を支えているのはダイバーシティであることもわかりました。私たちができることも中にはあるのではないかとヒントをいただいたような気がします。教職員の皆様と、これからダイバーシティの大学として成功するように努めたいと思います。今日のような会がこれからもっといろいろな形で展開できるようにできればと思います。

基調講演をしていただきました近藤社長、非常に勉強になりました。ありがとうございました。それから、本日参加していただきました皆様、ありがとうございました。皆様と一緒に学長のリーダーシップのもとで男女共同参画に恥じないような大学にしていましようということで私の挨拶とさせていただきます。」



開催しました：

教職員のためのトップセミナー2015・
女性研究者研究活動支援事業成果シンポジウム(国立大学フェスタ2015)
2015年11月13日(金) 14:30-16:00 大会会館 多目的ホール
講演：「多様性を受け止められるキャパシティ」
講師：株式会社日本レーザー 代表取締役社長 近藤 宣之 氏

今年のトップセミナーは、3年間の「平成25年度 文部科学省 科学技術人材育成費補助事業 女性研究者研究活動支援事業(一般型)」プロジェクト最終年度にあたることから、女性研究者研究活動支援事業成果シンポジウムと併催で開催しました。約50名の参加がありました。

このシンポジウムの様子は14日(土)の室蘭民報朝刊で紹介されました。



講演(日本レーザー 社長 近藤宣之氏)



来賓挨拶
(文科省 人材政策課長 柿田氏)



報告「ライフイベント期の研究支援制度を利用して」(清末准教授)

**本学では文科省のプロジェクト対象となる研究支援員配置以外にも
大学としてライフイベント期研究者への支援員配置を行ってきました**

ライフイベント期の支援員配置を利用して

ひと文化系領域長 教授 松本 ますみ

私は平成26年4月に新潟から本学に赴任しました。直後に夫の病気が見つかり、約2ヶ月間手術入院しました。その間、私はほぼ毎週末新潟に通っていました。新しい職場環境で戸惑いながらも、研究代表者としていた科研費基盤研究(B)の最終年度で論文執筆、国際シンポジウムの計画と実行、海外国際会議の研究発表準備など、てんてこ舞いの毎日でした。



平成27年4月からは私はひと文化系領域長となり、会議等で忙殺されることになりました。夫は室蘭に住むことになり、要支援1の認定を受けました。それに伴い、平成27年8月から本学の女性研究者支援ユニットからライフイベント期支援員の配置を受けました。事務補佐員の方に週2回(平成28年1月から週3回)4時間ずつ研究室に来ていただき、資料の整理やスキャニングをしていただくなど大変助かっています。そんな中、11月に金沢に住む高齢の母が緊急入院、金沢へ飛行機や新幹線で通う日々が続いております。事務補佐員の方がいないと全く仕事が回らない状況です。

遠方に住む親の介護、配偶者の介護、子育ては女性だけでなく男性も関わる問題です。女性研究者支援はとても嬉しいのですが、男女を問わない支援があると逆に女性の社会進出は高まるのではないかと、とも思います。特に介護に関わるライフイベント期はキャリア人生のピークと重なります。スカイプ会議などの活用も検討する時期なのかもしれません。

くらし環境系領域 助教 馬渡 康輝

我が家には、共働きの妻と中学生1人と小学生2人の子供がいます。家庭を持ってから今まで、学生時代と変わらない研究室中心の生活が続いていたため、子供らに対して父親らしいことがあまりできずにいました。おかげさまで、本支援により、私自身の作業時間を減らすことができ、少しずつですが家族と過ごす時間が増えてきたと実感しています。ありがとうございます。



本支援では派遣社員の方を配置して頂き、研究室内で行っている様々な作業のマニュアル化を中心に作業して頂きました。これまでは、機器の操作や実験の手順を文章化したマニュアルがありませんでしたが、学生さんを臨時補助員に雇用する際にスムーズに作業内容を伝えるにはマニュアルが非常に有効で、時間短縮になります。次年度以降も継続して作業時間を短縮するために、本支援の成果物を長期的に利用させていただきます。

今後共、ご支援いただけますようお願い申し上げます。

メンタリング制度試行を利用して

くらし環境系領域 准教授 内海 佐和子

メンタリングとは、若い人のものだと思っていた。しかし、本学のメンタリング制度は、女性研究者の場合、職種や年齢を問わず誰でも利用できるという。私はまったく若くはないが、研究室の主幹経験がないところに、ゼミ生を預かることとなった身にとっては、大変ありがたい制度である。



メンターは千葉大学の名誉教授にお願いした。この先生には、20年以上も一緒に研究を行っている関係上、どんなにつまらない質問でも遠慮なくできる。コース長や学科長では「上司」といった感が否めず、さすがにこうはいかない。

しかしながら、上手くいっていない点もある。メンターに会えば、互いの近況報告から、いつしかメンタリングに入り、その後、脱線と復帰を繰り返す。メンタリング時間は原則1回1時間。しかし、実際は3時間。正味も1時間では取まらない。また、メンターの定年により研究室がなくなった。メンタリング場所は、街中のカフェでもOKなのか。

緒に就いたばかりの制度故であるが、課題は残る。

もの創造系領域 助教 瀧田 敦子

私は、昨年3月に学位を取得し、4月に室蘭工業大学に赴任しました。学生から教員へと立場が変わり、この一年は毎日直面する新しいことに対応するのに手一杯になっていました。そのような中で、女性研究者支援ユニットのメンター制度試行を知り、制度を利用させていただきました。



相談相手を自身で依頼できることは、メンター制度の利点の一つです。私は、学部・修士時代の恩師に相談相手を依頼しました。10月に行ったメンタリングでは、私自身の研究や大学での生活などを話し、恩師の経験談や研究室、授業等で実践していることなどを伺う中で現状と将来に向けてのキャリアプランについて助言をいただきました。付き合いが長く、私の性格を分かっていたうえで厳しいことを言うので大変感謝しています。頂いた助言によって、数年前、数十年前を見て、研究・教育活動に取り組もうと気持ちを立て直すことができました。日々生活してみると今だけを見てしまいがちですが、メンター制度の利用が、自分の将来像とそれを実現するために現状+αの今やるべきことを確認するよい機会となりました。

英語セミナーを利用して

ひと文化系領域 准教授 曲 明

今年度、英語の論文(1本)と英語での発表(2回分)を準備するため、本学の女性研究者支援ユニットの「英語セミナー」制度を利用させて頂きました。まずは貞許先生を介して、英語論文の原稿と発表のスライドを講師の先生に送りました。およそ3~4日でチェックされた原稿が返って来ました。英文添削だけでなく細かいニュアンスなどがうまく伝わらないことがあるのですが、数日後に講師の先生が研究室に来てくださって、チェックした箇所をなぜ直したのか等を含め、マンツーマンで教えていただきました。その際、たくさん質問する事が出来、大変勉強になりました。英語の論文と同様、発表のスライドもチェックしていただき、実際先生の前で発表する練習もできました。



今まで英語は、自分で辞書や参考書を頼りに書いたりネイティブの方にチェックしてもらったりしていましたが、今回は女性研究者支援ユニットのお陰で、より完成度の高い英語論文を作成し発表することができ、私自身の英語能力も向上しました。心より感謝しております。

開催しました：

キャリア形成のためのランチセミナー第5回

「工業大学出身ならではの経験と仕事とは？」

10月20日(火) 12:00-12:45 A317室(学生・院生対象)

講師：桑原 順子 氏(福岡工業大学 工学部 生命環境科 准教授)



福岡工業大学の桑原先生を講師に迎え、46名が参加して開催されました。今回も北海道女性研究者支援室のご協力でも生中継されました。セミナーの様子は2015年10月20日の室蘭民報で紹介されました。

参加者の感想から一部をご紹介します。

●まだ1年生だけど、これから先を考える上で貴重な話をきけたと思いました。特に、研究職に就きながら育児をしたりと女性として大切にしていきたいことも両立なさっていて素晴らしいなと感じました。ありがとうございます。

(学部1年・女)

開催予告：

キャリア形成のためのランチタイムセミナー第6回

「現職教員を退職して

-大学院修士課程、博士課程で学ぶことの意義-

6月1日(水) 12:00-12:45 A317室

(学生・院生対象)



講師：須賀 朋子 氏

(学校法人 酪農学園大学 教育発達心理学研究室 准教授)

今回の講師は、中学英語教諭を経て、その経験も生かして大学院修士・博士課程で研究を深め大学教員となった須賀先生です。専門であるデートDV(ドメスティック・バイオレンス)予防啓発に関するお話も交えて、大学院で学ぶ意義についてお話しいただく予定です。

氏名・学科(コース)・学年・E-mailアドレスを添えてUFRまでお早めにお申込みください。申込み締切りは5月31日(火)です。

※今回はお弁当は出ませんが、お持込で飲食できます。男性の方もぜひご参加ください。

他大学の取組み紹介
豊橋技術科学大学 男女共同参画推進室企画「川柳」から
リケジョとか
そういう言葉がもう差別

ダイバーシティ通信 第4号(2016年3月)
国立大学法人 室蘭工業大学
男女共同参画推進室 女性研究者支援ユニット(UFR)
〒050-8585
北海道室蘭市水元町27番1号(A331室)
TEL: 0143-46-5194 / FAX: 0143-46-5195
E-mail: ge_ufr@www.muroran-it.ac.jp
URL: http://www.muroran-it.ac.jp/ge_ufr/

男女共同参画推進室
Office for Promotion of Gender Equality

女性研究者
支援ユニット
Unit for Female Researchers